



裁かれない拉致・殺人 無法状態の民兵 容認するイラク政府

アムネスティ・インターナショナル報告書 2014年10月



**AMNESTY
INTERNATIONAL**

公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本
amnesty.or.jp

目次

はじめに	1
調査方法.....	2
拉致、殺害、処刑.....	2
「イスラム国」への報復としての即決処刑.....	6
サマラでは.....	6
キルクークでは.....	7
拉致と行方不明.....	10
拡大するシーア派民兵勢力と欠如する説明責任	11
政府軍に拘束された人たちの拷問と死.....	12
国際法とシーア派民兵の行為.....	15
結論と提言.....	16

表紙写真

悪名高いイラクの武装民兵マフディー軍の分派サラヤ・アル・サラムの戦闘員© AFP/ Getty images

はじめに

ここ数カ月、シーア派民兵は、バグダッドやその周辺でスンニ派の民間人男性を誘拐し、殺害していた。これらの民兵は、しばしばイラク政府からの資金や武器の支援を受けながら、国軍との間で、暗黙の申し合わせから事前調整の上での演習、さらに合同演習まで、さまざまな形で連携しながら活動している。したがって、アムネスティ・インターナショナルは、民兵による戦争犯罪など重大な人権侵害は、政府に多大な責任があると考えている。

犠牲者は、自宅や職場、検問所などから拉致された。多くの犠牲者は通常、手錠をかけられた状態で後頭部を撃たれ、遺体となって発見されている。同様の証言は保健省職員からも得られ、「ここ数カ月、金属性やプラスチック性の手錠をかけられた、銃撃による傷痕がある身元不明の男性を数多く引き取った」とアムネスティに説明した。バグダッドで家族らが持っていた写真の遺体は、処刑形式の殺害が日常的に行なわれていることを示していた。

家族が多額の身代金を支払った場合でも、殺害されたケースもある。数家族は、「拉致犯から身代金を要求する電話で震え上がり、死にもの狂いで要求金額を工面して支払ったあげく、最愛の息子は殺されていた」とアムネスティに語った。「友人や知り合いに頼み込んで借りたお金を返すすべがない。殺された息子が唯一の働き手だったから」と、母親は途方に暮れていた。何週間、何カ月も安否や所在が不明な場合も多かった。

バグダッド、サマラ、キルクークで、シーア派民兵が、数多くの拉致や違法な処刑を行っていることが、アムネスティの調べでわかった。

宗派間の緊張が高まる中で、このような犯行が行われている。この6月、政府は多くの北部の支配地域をスンニ派武装勢力の「イスラム国」に奪われた。宗派間の紛争は、かつて最悪だと言われた2006年から2007年当時よりも激しさを増している。政府が支援するシーア派民兵と、敵対するスンニ派の武装グループは、双方の市民を攻撃対象にしてきた。

「イスラム国」勢力は支配地域での甚大な人権侵害に加え、首都バグダッドのシーア派住民が多い地域、時には礼拝所などにしばしば砲撃を加えている。その攻撃は、治安部隊や親政府民兵だけでなく、礼拝者ほか民間人への意図的で無差別なものである。

一方、「イスラム国」には何をしても許される風潮や無法状態であることをいいことに、シーア派民兵は報復と見せかけて、スンニ派男性を拉致、殺害したり、その家族から身代金を強奪している。政府に民間人保護や治安維持の力や意思がないため、民兵はやりたい放題に振る舞い、罪を問われることもなく殺害などを犯してきた。

アムネスティが今回の調査や他の機会に得た情報では、現在行われている重大な人権侵害の実行者は主に、シーア派の民兵であった。しかし、政府が、その民兵に武器を調達し、何らかの支援をし、治安部隊が民兵と共謀またはその人権侵害を黙認している状況では、政府の責任を看過することはできない。同時に、政府軍が直接、犯罪に手を染めている事態も相変わらず続いてきた。

調査方法

アムネスティの調査団は、2014年8月から9月にかけての6週間、クルド自治政府が治める地域を含むイラク中部と北部で現地調査を行った。この報告書は、調査で得た情報に基づいている。現地では、被害者や殺害された犠牲者の家族、目撃者、医療従事者、役人、イラク人権委員会の委員、弁護士ら多数に直接聞き取りをした。多くの場合、犠牲者の氏名は仮名とし、本人や家族の特定に結びつく情報は、彼らの身の安全上、割愛した。同様の理由で、聞き取りの日時や場所も省いた。

拉致、殺害、処刑

拉致被害者の中には、家族が身代金を払えば解放するという約束があったにもかかわらず、苦勞して工面した身代金を支払っても殺害された人たちもいる。

教育省職員で3人の幼児の父であるマジドさん（31才）とエンジニアのナエフさん（30才）はいとこ同士だった。2014年5月30日午後3時15分頃、バグダッドの北約30kmにある、アル・タジ地域の軍のキャンプ近くで、軍の車両に乗った軍服姿の男たちに拉致された。6月2日の夕方、家族は要求された身代金（約9万米ドル）を差し出したが、2人は返されなかった。翌日、2人の遺体がバグダッド北西のシーア派が多数を占める地域、アル・シュラで発見された。2人とも頭を撃たれ、両手は後ろ手に手錠をかけられていた。

当時一家の大黒柱であるナエフさんは、ティクリートに職場があり、家族といっしょに5年間、職場近くに住んでいた。長らく反政府スンニ派の拠点とみなされていたティクリートは、その後、「イスラム国」の戦闘グループに占領される。そして、その住民、とりわけ若者は、そこに住んでいるというだけで十把ひとからげに、「イスラム国」のようなグループを支持していると疑われ、そのためしばしば政府軍とシーア派民兵双方から攻撃目標となっている。このようにして、同地の治安状況が悪化してきたため、家族は引っ越すことになり、拉致された当日はナエフさんが家族の家具を運んでいたところだった。

マジドさんとナエフさんの親族は、次のようにアムネスティに語った。

「その日（5月30日）、家財を運ぶため、ナエフとナエフの友人と一緒にティクリートに行った。バグダッドに行く途中、アル・タジに近い軍の検問所で止められ、トラックの運転許可証を求めら

れた。ナエフと友人はトラックとともに検問所に残り、私は許可証を得るためにバグダッドに行った。マジドはいろいろな知識があり、許可証の手続きも知っていたので、私といっしょに来てもらった。金曜日だったが、なんとか許可証をもらい、検問所に戻った。兵士に許可証を見せ、バグダッドに行くことが許された。私がトラックを運転して、ナエフとマジドは私の車で、後に続いた。アル・タジの軍のキャンプの近くで軍用車に止められた。午後 3 時 15 分頃のことだった。ナエフとマジドが取り調べのために残り、私ともう 1 人は、そこで 2 人を待つことは認められなくて、15 分間運転し続けた。その後、2 人に電話をしたが応答はなく、電源も切られてしまった。そのまま運転を続け、バグダッドの検問所に着いたとき、私の車が検問所を通り抜け、バグダッドに入っていくのを見た。ナンバープレートは取り外され、2 人の若い男が運転していた。検問所では、普通どの車も止められ書類を調べられるのに、その車は止められなかった。私はそこでトラックから降りタクシーで、マジドとナエフと別れた場所に戻った。でも誰もおらず、私たちを止めた軍用車もすでに去っていた。午後 4 時 20 分頃のことだった」

マジドの母親はアムネスティに次のように語った。

「その晩 8 時に、息子の携帯で男が電話をかけてきて、マジドとナエフの解放のため身代金（およそ 18 万米ドル）を要求してきた。『私にはこの息子しかおらず、お金もない』と言うと、男は『金を工面しろ、警察には行くな。行けば 2 人の命はない』と言われた。その後何回も電話をよこし、結局、半額に値を下げてきた。私はお金を借りなければならず、ナエフの家族もそうだった。6 月 2 日の夕方、現金を指定場所に持っていった。そこで 1 時間待った。それから電話があったので、息子とナエフと話がしたいと頼んだ。10 分後にまた電話があり、2 人と話したが、マジドはとても疲れているようすだった。誘拐犯からタクシーに乗って別の場所に行くよう指示され、そこに行くと、また電話があってさらに別の場所を指定された。夜遅くで、暗くて私以外に誰も見かけなかった。白い車が近づいてきて私のそばで止まり、中の男たちが『ヤッラ、ヤッラ、金』と大声で叫んだ。息子の居所をたずねると、『俺たちの後から来る』と言う。彼らはお金を奪い、車は走り去った。待てど暮らせど息子は来なかった。次の日、2 人の遺体が見つかったと、親戚の者から電話があった。2 人とも、頭を撃たれていた。1 人息子がいなくなり、もう生きている意味がない」

遺体が発見された場所で警察が撮った写真によると、マジドさんとナエフさんは草むらに顔を伏せてひざまずかされ、両手は背中後ろで金属製の手錠がかけられていた。ある役人はアムネスティに事件の構図をこう説明した。

「『イスラム国』グループがいる地域を行き来し、あるいはその近くに住む、戦いに参加できる年齢のスニ派の男を、多くの民兵はロリストまたはテロリストの支持者であるとみなしている。だから頻繁に殺されているんだ。だが民兵のなかには、スニ派というだけで狙う者もいる。スニ派のテロ・グループの犯罪に対するやみくもな復讐というわけだ。残念だが、このような行為が広く行われていた 7、8 年前の状態に逆行しているようだ」

セイラムさん（43歳）はバグダッドの実業家で9人の子どもの父親であった。彼は7月15日午後4時半、バグダッドの北およそ30kmにあるアル・タジの自分の工場で、数人の従業員の目の前で誘拐された。家族は6万米ドル相当の身代金を支払ったが釈放されることはなかった。2週間後、家族は、遺体をバグダッドの死体置き場で発見した。頭は砕かれ、両手に金属製の手錠がかけられていた。

家族が、アムネスティに次のように語った。

「セイラムは以前にも、息子と兄弟といっしょに、職場で逮捕されたことがあった。今年の7月3日、3台の軍用車で、2人の役人と数人の兵士、覆面をした私服の男が来て、逮捕したんだ。兵士といっしょにいた覆面の男はシーア派教徒だったが、その男が連絡をしてきて、3万ドルを払えば、みんなを釈放すると言った。私たちは2万7,000米ドルで合意し、支払いが済むと3人はすぐ解放された。その後7月15日、セイラムがまた誘拐された。今回は軍服を着、武装した3人の男たちで、車はナンバープレートのない一般車でやってきた。その晩、20万米ドル払えば釈放するとの電話を受けた。『そんなお金はないと』言うので、7月15日から21日の間、合計14回の電話があり、その結果、身代金は6万米ドルに下がった。私たちは身代金をアル・シュラまで持って行き、それを高速道路の橋の上で、下で待っている者に落とすように指示された。30分後、アル・タジの軍検問所の近くにある、マシャト歩道橋の近くでセイラムに会えるはずだった。長い間待ったが、セイラムは現れなかった。私たちはセイラムを捜し始め、あらゆる警察署を当たった。そして8月3日、アル・シュラの警察署で彼の遺体の写真を見つけた。手錠をかけられ、重いものか大きな口径の弾丸によるものか、彼の頭部はほとんど破壊されていた。遺体は死体置場にあった」

遺体は家族の女性によって埋葬のために回収された。男性が行けば誘拐される危険があり、殺される恐れもあったからだ。家族も拉致や殺害を恐れて、その後引越した。セイラムさんが拉致された工場は2つの軍の監視塔の範囲内にあり、7月初めにセイラムさんたちが捕まったときは、そのひとつの軍の兵舎に入れられていた。

ハーリドさん（39歳）はサマラの実業家で4人の子どもの父親であった。7月26日の早朝、サマラからバグダッドまで車の運転中、拉致された。家族がアムネスティに次のように語った。

「その日午後10時半、誘拐犯からの最初の電話があって、15万米ドルを要求してきた。私たちの持っていない金額で、借りることもできない。私たちは6日間交渉し、身代金は4万5,000米ドルと彼が拉致されたときに乗っていた車ということになった。私たちにはそれが借りることのできる限度だった。身代金の額が決まってやっと、ハーリドと話してまだ生きていることを確かめることができた。8月1日、大多数の住民がシーア派であるバグダッド近隣にお金を持って行くように言われた。お金を渡すことになっていた者が指定された場所に行くと、誘拐犯は1時間の間に5回も

受け渡し場所を変更し、やっと身代金の受け渡しが済んだのは午後 2 時半頃だった。ハーリドは 30 分から 45 分後に釈放されるはずだったが、されなかった。午後 9 時半『我々はハーリドを解放した』とのメッセージを受け取ったが、彼が指定の場所にいた形跡はなかった。8 月 11 日までずっと捜し続け、バグダッドの死体置場で遺体を発見した。彼は、頭を 3 カ所撃たれていた。死亡診断書によると、死亡日は 8 月 1 日で、私たちが身代金を払った直後に殺されたことになる。その日、彼と話したのに」



シーア派民兵による拉致の犠牲者



ある政府の役人がアムネスティに説明した。

「民兵の一部は泥棒であり殺人者だ。犠牲者を殺す前に、家族からお金を得ようとする。こうした民兵に誘拐されたら、家族がどんな高額を支払おうと、ほとんど生きては帰れない。また、金を儲ける目的だけで誘拐する民兵もいる。彼らは誰でも狙う。キリスト教徒、クルド人、シーア派さえも。私自身はシーア派だが、拉致され、身代金を支払って解放されたシーア派の人を数人知っている。彼らは民兵の拠点の地域で拉致された。普通の犯罪者がそんなことをするのは無理な場所だ。とはいっても、ほとんどの場合、奴らはスンニ派教徒を誘拐する。犠牲者をテロリスト呼ばわりするのが簡単だからだ。そうなれば、誰も何もしようとしなない」

夫が拉致をかりうじて逃れたキリスト教徒の女性は、アムネスティに次のように語った。

「7 月 21 日午後 9 時、3 人の武装した男たちが家にやってきた。彼らは近隣の警備をしていると言ったけれど、これは嘘だと思った。幸運にも夕食会をしていて、家には大勢の人がいた。男たちは立ち去ったけど、その後、電話で高額なお金を要求してきた。彼らは夫に『我々は、おまえがキリスト教徒だということは知っている。おまえは悪い人間ではないから殺したくはない。しかし金は払え。支払いを逃れようと引っ越すことはできない。我々はお前の家族のことを何でも知っている。どこに行こうと見つけ出し、殺す』と脅した。それで、私たちは家を離れた。数日のうちにイラクへ出発するつもり。支払ったら安全だと誰が言えるの。そんな恐怖の中で暮らしたくはない」

結局、この家族は国を離れた。この家族を含む住民がアムネスティに語ったところによると、脅迫と恐喝をしているのは、シーア派の民兵組織、アサイブ・アール・アル・ハクのメンバーと思われる。「彼らは、この地域で非常に強い勢力を持っている。ここを支配しており、彼ら以外には活動できない」と、住民の1人はアムネスティに話した。この家族が警察に通報しても無駄で保護などは期待できるはずもないと思っているのは、首都が無法状態にあることを如実に語っている。そこではシーア派の民兵は何をしても罰せられないことを知っているのだ。

「イスラム国」への報復としての即決処刑

サマラでは

アムネスティの得た情報によると、人口およそ40万のスニ派が多数を占める都市サマラとその周辺で、6月初めから、170人以上のスニ派の若者が拉致されていた。その後、数十名が死体で発見され、残りは行方不明である。6月6日の1日だけでも、30人以上が自宅かその周辺で拉致され、銃殺され、遺体は近くに捨てられていた。

タクシー運転手のオマールさん（22歳）は6月6日の朝、軍服姿の男たちに家族の面前で、ベッドから連れ去られた。翌朝、近隣で遺体が発見された。母親はアムネスティに次のように語った。「私たちが寝ているとき、民兵たちが押し入ってきた。息子が目を覚まし、『どうした？』と叫んだ。男たちは息子をベッドから引きずり出し、外へ連れて行った。そこにはもっと大勢の武装した男たちと、3台の黒い車が待っていた。携帯電話も全部奪われた。外では1人が私たちの車を見つけると銃弾を撃ちこんだ。隣人の息子も同じように引っ張りだされて、一緒に連れ去られた。その後、2人をあちこち捜しまわったが、翌日近所のモスクで2人の遺体を見つけた。私の息子は頭を2回、胸を1回撃たれていた。息子を連れ出しているとき、民兵の1人が息子の名前を尋ねた。彼らは息子の名前すら知らなかった。おそらく連中は若者なら誰でもよかったようだ。私のただ1人の息子が犠牲になったのだ」

ファレスさん（20歳）と イッサムさん（22歳）は兄弟で2人とも労働者だった。同じ6月6日の朝、叔母の家で捕えられた。数時間後、彼らの遺体は近くの建築現場で発見された。2人とも銃で頭を撃たれていた。家族の1人がアムネスティに次のように話した。

「午前7時15分、黒い制服を着て武装した8人の男たちが家に来て、家族の配給カードを調べた。カードには2人の名前が載っていないので、『ここに住んでいないのに、なぜいるのか』と聞いた。2人は親類で、前の晩尋ねてきて、夜遅くまで話し込み、いつものように泊まったのだと答えた。彼らは2人を連れ去るとき、『30分後に戻す』と言ったきりだった」

別の親族が、その叔母の家から 200 メートルくらいのところで、午前 11 時、2 人の遺体を見つけたと言った。犯人は、おそらく兄弟が叔母の家に隠れていたと思ったのだろう。

タクシー運転手のアブダル・サマドさん（49 歳）も、同じ日の朝に家族の面前で捕えられ銃殺された。銃撃を目撃した親族と近所の人々はアムネスティに次のように語った。

「黒服で覆面の男 4 人が、アブダルを家から引きずり出した。2 台の車が待っており、他にも武装した男たちがいた。連中はアブダルを 30 メートルくらい引きずっていった後、その場で射殺し、車で走り去った」

他の犠牲者の家族や地元のリーダーたちの話では、6 月 6 日朝の襲撃で 37 人の男性が拉致され殺害された。その大部分が、民兵の幹部が拠点とするヘイ・アル＝デュバットとその東部地域で起こっていた。この大量の殺人は、その前日、「イスラム国」の戦闘員が短時間、それらの地域に侵入したことへの報復とみられる。「イスラム国」の戦闘員はヘイ・アル＝デュバットとその近隣地域を通り、東部からサマラに入った。一部の住民は彼らを支持したり歓迎したようだったが、侵入はほんの一部の地域に数時間いただけであった。アムネスティの得た情報では、6 月 6 日以降に拉致され殺害された人たちは 1 人も「イスラム国」の侵略や襲撃に関わってはいなかった。もし関わっていたとしても、捕らえて警察に渡すだけでよかったはずである。捕えた人を即決に処刑することは全面的に禁じられており、このような状況では戦争犯罪である。

キルクークでは

ヌールさん（28 歳）は看護師で幼い女の子の父親であった。8 月 24 日夕方、キルクークの自宅近くで拉致された。自宅周辺に住む人たちの大多数がスンニ派アラブ人の住む地域である。1 時間後、近くにある川の土手のごみ置き場で遺体が見つかった。同じころ同じ地域でやはり自宅から拉致された 2 人の若者の遺体も、そこにあった。3 人とも後頭部を撃たれ、両手を背中で縛られていた。

ヌールさんの家族はアムネスティに次のように語った。

「私たちは近くにあるモスクでお祈りをし、それから家に帰り、お茶を飲んだ。その後、ヌールは病気の家族の具合を見に行き、すぐ戻ると言った。戻ってこなかったのが捜しに行くと、近所の人々が、ヌールは拉致されたと言った。彼が電話で話していた時、2 台の四駆車と 1 台のピックアップトラックが止まり、彼を車に押し込み走り去ったと言うことであった。近所の人々はまた、別の 2 人の近隣の人も同じように拉致されたと言った。私たちは彼の遺体を死体置き場で見つけた。恐ろしい光景だった。皆、後頭部を至近距離から撃たれ、手首には手錠の跡があった。なぜヌールは殺されたのか？ 殺される理由がない。いい子だった。病院で働いており、家族の面倒を見て、勉強もしていた。看護とイスラム教法典の 2 つの学位を持ち、仕事をしながら、修士号をとるために勉強を始めようとしていた。そのヌールはもうこの世にいない」



シーア派民兵による拉致の犠牲者

他の2人の犠牲者、マームードさん（19歳、労働者）とハッサンさん（27歳、バス運転手で若い2人の子どもの父親）の家族がアムネスティに次のように語った。

「2人はほぼ同じ時刻に、3台の車できた男たちに拉致された。マームードは道路で、ハッサンは自宅の前でバスの修理をしているときに連れ去られた」

それぞれの家族も近隣の人たちも、なぜ3人が攻撃目標となったか理由がわからなかった。前日（8月23日）、市の警備拠点に3回にわたる爆撃があった。「イスラム国」が犯行声明を出しており、一部のスンニ派の人びとは、今回の殺害はその報復だと思っている。翌日の夕方（8月25日）、キルクーク南東のヘイ・アル＝ナセル地区で、60歳の弁護士とパン職人が射殺された。弁護士の家族の2人は、襲撃された時、負傷した。襲撃に居合わせた家族の1人はアムネスティに次のように語った。

「私たちは自分たちの製パン所をもっていたが、長い間使っていなかった。それで、以前それを取り仕切っていたパン職人のアリに、オーブンの使い方を教えてもらおうとした。アリは午後9時過ぎにやってきた。私たちは作業を始めたが、電気が切れ、外に出て発電機が動くのを待っていた。そこに立って話していると、1台の車が通りかかり、私たちに向かって続けて発砲してきた。あっという間のことだった。ファヤド叔父とアリが殺され、2人が負傷した。」

2日後、8月27日朝、55歳の部族長で18人の父親である、カリム・アワド・ファルドスさんは、2人の家族、イブラヒム・サジヒルさんとサーディ・アーマドさんとともに、競技場の近くをドライブしているときに射殺された。家族がアムネスティに語った。

「3人が家を出てすぐだった。カリムは助手席に座り、イブラヒムが運転し、サーディは後部座席にいた。拘束された家族の事件を解決するため、打ち合せに行く途中だった。1台の車が後ろから

近づき、彼らの車に向かって発砲し、3人とも殺した。2003年まで陸軍将校だったカリムは、アル・ルビビ部族のリーダーになり、地元の市民団体3つに関わっていた。今年4月には選挙に立候補している。当選はしなかったが。最近、「イスラム国」が国の一部を制圧して以来緊張が高まる中で、カリムは宗派間の関係を改善し意思疎通を図るための調停に関わっていた。そのため、改善を望まない人たちの攻撃目標になったのだろう」

キルクークでは宗派間の緊張が特に高い。市の主な民族である、クルド人、トルクメン人、アラブ人のグループが、市の支配や豊富な石油資源の支配をめぐる長い間争ってきた。今年6月、イラク軍が北部イラクから撤退したとき、クルド自治政府の治安部隊ペシュメルガが介入して市を支配し、「イスラム国」の進攻に歯止めをかけた。クルド自治政府は以前からキルクークの領有権を主張しており、市の支配をあきらめるつもりはないと、最近その主張をあらためて表明している。

市内では、トルクメン人社会のスニ派とシーア派の間、アラブ人社会の両派間、あるいは民族をまたいだ宗派間、そしてアラブ人とクルド人との不信が高まっている。「スニ派トルクメン人とスニ派アラブ人は『イスラム国』に協力している」とか「シーア派トルクメン人とクルド人はイランが後ろ盾のシーア派民兵に協力している」などの非難があちこちで聞かれるが、それが当たっている場合もある。キルクークは、ペシュメルガとシーア派民兵のいる最前線の都市となっている。彼らは時にイランの戦闘員に支援され、スニ派アラブ人とスニ派トルクメン人社会の一部住民の支持を受けた「イスラム国」と、市の南、西、北西で闘っている。シーア派の民兵は、クルドのペシュメルガの協力を得て、あるいは少なくとも暗黙の了解を得て、おおびらに作戦を展開している一方、「イスラム国」の戦闘員は目立つ行動を控え、支配していない地域への爆撃などの奇襲攻撃に集中している。

息子が拉致されて殺された男性が、アムネスティに語った。家族にはスニ派とシーア派がおり、殺された息子はスニ派だった。

「『イスラム国』戦闘員の問題とそれが引き起こす戦争で、民族間や民族内の関係が悪化している。スニ派でもシーア派でも以前は問題ではなかった。今や、一部の人が状況を悪用し、関係を分裂させる原因を作っている。私はシーア派で、息子2人はスニ派とシーア派だ。私たちに違いはない。全員に共通する正義があるはずだ」

しかし現時点では、襲撃の犠牲者に対する補償や加害者の裁きの先行きは見えない。当局には、拉致と即決処刑の加害者である民兵とイラク軍の責任を問う意思はなく、このことは長らく、国全体の懸念である。6月以降のキルクークの異常な警戒態勢により、犠牲者の家族が正義と償いを得ることが一層困難になり、事実上不可能になっている。本来、キルクークの司法行政は、バグダッドの中央政府の管轄である。しかし、政府軍は北部から撤退し、地元警察と公務員は、数カ月も給料が支払われていないのが実態だ。現実には、市を支配下におくクルド自治政府が何の責任も負わず、

司法の責務を引き受ける意思も能力もないようにみえる。

犠牲者の家族は、正義と償いを得る望みをあきらめる一方で、標的とされる恐怖は相変わらず付きまとう。「私は息子を1人失った。これ以上失いたくない。息子は戻って来るわけではないし、他の子どもを危険にさらすことはできない。次に誰が犠牲になるのか。法の支配も保護もない」と、犠牲者の親族がアムネスティに語った。「クルド自治政府部隊はキルクークを支配しているが、数週間前、シーア派の民兵が武器を誇示して市中を行進しても止めようとしなかった。一方で私たちスンニ派は、『イスラム国』に属しているかのように扱われている」と、別の住民が嘆く。アムネスティが聞き取りをした人たちは、誰もが報復を恐れて、面談しているところを人に見られることを嫌った。この人たちがなぜそんなに報復を恐れるのか。市内で起きている法支配の崩壊と不処罰の横行を見て、納得せざるを得なかった。

アムネスティは、他にもスンニ派アラブ人4人の情報を入手した。そのうちの3人はアンバー地域出身で、この8月、キルクークで同じような方法で拉致され殺害された。さらに数人が市内で拉致されているが、その安否や居場所を家族はわからず、情報もなかった。

拉致と行方不明

民兵に拉致された人びとの多くは、行方不明のままだ。被害者の家族のほとんどは、自身が拉致や殺害される恐れがあるため、表立って捜したりしない。6月に家族を拉致された弁護士は、捜したくても捜せない状況を次のように語った。

「数人の友人には行方捜しを頼んだが、自分ではできない。自身もそうだが、何より息子に何が起ころかわからないのが心配だ。この辺では民兵はやりたい放題だ。警察や軍とつながっていて、何をしても罪を問われない。警察に行って民兵に息子が拉致されたなどと言えば、言ったことが民兵に知られ、家族が報復される。そんな危険は冒せない。拉致されないよう、息子には大学での勉強以外は自宅で過ごさせている。まるで自宅軟禁だが、とても怖くて外に出せない」

6月12日の夜、モスクで働く2人の男性がバグダッドの自宅から覆面グループに拉致された。拉致の様子は、近くのモスクの監視カメラに写っていた。犯人は監視カメラを壊したが、破壊を免れたカメラが撮影していた。映像では、肉屋を営む家族3人と不動産業者1人の計4人が、同じように覆面集団に拉致されていたのも写っていた。6人はそれ以来、行方不明のままだ。7月12日にはサマラ北部の検問所で、ティクリートから荷物を運搬していたタクシー運転手と農業従事者の兄弟2人が、拉致された。当時2人と一緒にいた家族がアムネスティに次のように話した。

「ティクリートの治安が悪化していたので引っ越している最中だった。車には全所持品と書類関係

が入っていた。武装した男たちに検問所で、『俺たちは、サラヤ・アル・サラムの者だ』と言われた（サラヤ・アル・サラムとは、長らく拉致や恣意的殺害に関わってきた悪名高いマフディー軍の分派）。連中は2人を車から降りさせ、残る私たちに『すぐに解放するからちょっと待て』と言ったきり、4時間以上待っても、解放しなかった。その後、待っている私たちを彼らの車でサマラまで送り、『2人はすぐに解放する』と再度言い残した。しかし、結局解放はされなかった。2人が今、どこで何をしているのか、生死も含めて何もわからない。身分証明の書類もすべて車中に残してきたため、私たちは今、自分たちの素性を示すことができない」

拡大するシーア派民兵勢力と欠如する説明責任

シーア派民兵組織で最大規模を誇るものは、各階級に何十万人もの兵力を擁する。しかし、一見軍隊のように見えるとはいえ、法にもとづく統制や監督を受けず、説明責任も問われない。しかし、民兵組織は長年、シーア派が牛耳る中央政府からの支援と庇護を受けてきた。

2014年6月、イラク軍が国土の3分の1から敗走するという驚くべき事態が起き、シーア派民兵の権力と正当性は劇的に高まった。背景には、首相や政界・宗教界のリーダーらが市民に対し「反乱者らの『イスラム国』に対して武器を取って立ち上がれ」と呼びかけた事情がある。軍隊や治安部隊に入れという呼びかけもあったが、主な受け皿となったのは民兵だった。というのも、進撃する「イスラム国」兵の面前で、数万のイラク軍兵士が軍服や武器を捨てて敗走したため、軍は著しく弱体化していた。



シーア派民兵組織のバナー

民兵は、多くは制服を着用しているが、独自に活動する民兵もあれば、軍とともに戦場や検問所で活動する民兵もいる。いずれも、軍事基地と拘禁施設を拠点としている。シーア派民兵組織のひとつ、アサイブ・アール・アル・ハクのリーダーは6月の報道各社の取材で「我々の組織は軍隊のようなもの。いろいろな部門を持ち、各部門には専門の担当者がいる。軍には砲兵隊や空爆部隊があるが、こちらには地上で、地域制圧を行う戦闘員がいる」と語った。同組織の政治部門の報道官も「すべての前線で政府軍とともに戦っている。制服を着て治安部隊として活動して、充分筋は通っ

ている」と述べた。しかし、民兵は軍隊より下位にあるわけではない。それどころか実際には、非難を受けますます弱体化し機能していない軍よりも力を持ち、立場も軍と同じかそれ以上である。

2014年9月、バグダッド北部の検問所で任務中の同民兵組織の兵士がアムネスティの代表団がいるとは知らずに、次のように語った。

「ティクリートから犬ども（スンニ派のこと）が来れば、処刑する。あっちの連中は、全員『イスラム国』と一緒に動いている。バグダッドに来てテロをやらかす。だから俺たちが阻止しないと」

同じように組織の司令官が戦場の同僚からの情報をうっかりジャーナリストに漏らし、「6人の『イスラム国』兵士を待ち伏せして拘束した。2人を殺害し、4人を軍隊に差し出した」と話していた。

1月に「イスラム国」に制圧されたファルージャ西部の町を脱出して逃げてきた男性（68歳）は、アムネスティに次のように語った。

「私たち家族が逃げた後、『イスラム国』のグループはわが家の家財を略奪した。だから、別の家族に住んでもらい、あの盗人連中がわが家に乗っ取らないようにしている。定期的にファルージャに帰り、家と土地に目を光らせている。でもこれは、私が年寄りだからできることだ。息子たちは行けない。危険すぎる。もし行けば、シーア派民兵にバグダッドとファルージャの途中で殺されるだろう。連中はファルージャを往来する人をすべて、反政府テロリストと見なすからだ。そしてファルージャを出てバグダッドに住んでいることを理由に、『イスラム国』メンバーは息子たちを政府側の人間だと決めつけるだろう」

これまで述べたように、準軍事組織の民兵と国の治安部隊・軍との境界線はしばしば曖昧だ。治安部隊や軍は民兵とともに動くこともある上、拘束した兵士や容疑者の超法規的処刑にも手を染めているからである。

今年3月、軍の兵士が次のように語った。

「誰を捕まえてもテロリストだから、特に調べを必要としなければ、その場で殺す。私は何十人もの処刑を見てきた。（反テロ法を茶化して）規約第4条は『拘束』、第5条は『殺害』だ。『イスラム国』の連中だって拘束しては殺している。だから俺たちも同ことをしている」

政府軍に拘束された人たちの拷問と死

本報告書はシーア派民兵らによる急増する虐待を主に取り上げているが、政府軍による暴行も減少することなく続いている。

弁護士で2児の父親、ウダイ・タハ・クルディさん（33歳）は6月10日、バグダッド中央裁判所

の令状で逮捕された。2週間後の6月25日、家族は本人の死亡連絡を受けた。内務省の6月24日付けの書面によると、クルディさんはバグダッドにあるテロ対策総局内で拘禁中の6月24日、「健康上の問題」で苦しんでいたため6月25日に病院に搬送した、とある。この書面は、イラク弁護士会の照会に対する回答で、「拷問された弁護士の死について」という表題がついていた。書面には裁判官の証言として、クルディさんは「イスラム国」幹部の1人であり、テロリスト一族の出身であり、兄弟がテロ関連の罪で服役中であるとも書かれている。また、本人は「拷問は受けていない」と審問で答えたという証言も記されていた。

9月7日、弁護士会の副代表がアムネスティに、「法務評議会は、クルディさんは腎不全で死亡したのであり、疑われるような拷問の結果ではない、と弁護士会に伝えてきた」と語った。しかし、アムネスティが入手したクルディさんの遺体の写真では、事実は違う。遺体には無数の打撲傷、開いたままの傷、熱傷の痕跡があった。家族によれば、逮捕の前まではまったくの健康体だったという。

アムネスティは、大学法医学のデリック・パウンダー教授に、写真の検証を依頼した。

「生前に受けた傷が背中に複数、特に左腰部にある。そして前腕部内側、右肘、また上腕部の外側にも見られる。左臀部の打撲傷に関連した複数の円形の傷がある。右ふくらはぎには、うすい斑点状の皮膚損傷群が見られるが、むき出しの電気コードの端に接触して感電した傷である可能性が極めて高い。左足の小指には、足指の付け根が固く縛られていたために乾性壊疽を招いたと思われる明らかな黒変が見られ、電気コードがきつく縛り付けられていた可能性がある。つまり、電極をあてがい左足の小指から右足ふくらはぎに通電させたと考えられる。全身に傷があり、直接の死因が腎不全とされていることを考えると、電気ショックの拷問による筋肉の損傷で腎不全を引き起こした可能性が非常に高い」



拘束中に死亡した弁護士ウダイ・タハ・クルディさん（33歳）

「腎不全は死直前の状態を示すに過ぎず、怪我あるいは病気といった直接死亡を引き起こした一連の事象の起因（原死因）を表していないため、死因の記述として受け入れられない。死亡診断書で使われる死因分類の国際標準 WHO（世界保健機関）ルールに照らしても、適切ではない」

8月、3年間拘禁されていた男性（25歳）が疑惑の死を遂げた。母親がアムネスティに次のように語った。

「2011年8月に、軍が2人の息子を連行していった。2カ月以上消息がわからず、その後、軍から息子たちはバグダッド軍用空港にある第54旅団に拘禁されていると連絡があった。2人はひどい拷問を受けていた。歯は折られ、爪の何枚かが剥がされていた。その後、アブグレイブ刑務所に移されたが、そこでの状況は良く、私は2週間おきに面会することができた。その刑務所が攻撃されたとき、息子たちはその時点までにかけていたほとんどの容疑で無罪となっていた。そして残りの容疑での無罪も確信していたので裁判の終了を望んでおり、刑務所から逃げることはしなかった。その後、2人はどこかに移されたが、どこかは知らされず、今年4月5日に電話をくれるまで1年間も消息がつかめなかった。息子たちも場所を知らないという。8月1日に知人から、『息子たちの必要書類を持って病院へ行け』と電話がかかってきた」

しかし、必要書類は逮捕の時に身分証明書などを全部持って行かれていて、手元にはなかったようだ。

「病院には下の息子しかいなかった。本人だと簡単には判別できないほどひどい姿だった。『兄さんはどこにいるかわからない』と言う。護衛を買収して8月4日に再び息子に会った。息子は前より回復していたが、『民兵が監視している。お母さんも僕もあぶないので、二度と面会に来ないで』と言われた。それでも食べ物を持って病院に日参したが、息子に再び会うことは叶わなかった。8月11日、護衛に言われた。『息子は何日も前に死んでいるぞ。誰も伝えなかったのか?』と」

母親は監察医局に行く勇気がなく、シーア派の友人に遺体を引き取りに行ってもらった。死亡証明書によれば、息子は8月9日に死亡したとあったが死因の記載はなかった。

「遺体の後頭部に打撲の跡があったが、これが致命傷かどうかはわからない。わかっているのは、息子に会ったときは元気だったのに、その数日後になんの説明もなく死んでいたということだけだ。もう1人の息子の消息も、1年以上前にアブグレイブ刑務所から移された後はわからない」

アムネスティには、政府軍による拷問と虐待の情報、とりわけテロ対策法のもとでスンニ派の男性が拘禁されているという情報が、絶え間なく入ってくる。テロ対策法で5カ月間拘束され、8月29日に嫌疑を晴らして釈放された男性は、最初にモスルで26日間拘束され、その後の4カ月はバグダッドの軍用空港の尋問施設に留め置かれ、その2カ所で繰り返し拷問を受けたとアムネスティに語った。ケーブルや棒で繰り返し殴られ、長時間の電気ショックでは特に陰部が狙われたり、ショックが増すように水をかけられたりしたという。棒を使った性的暴行の脅迫も受けた。拘束されている人たちは皆、同様に拷問されていた。彼は5月にバグダッド中央裁判所が釈放命令を出したが、

その後も3カ月間拘束が続き、その間もほぼ日常的に拷問が続いたという。

イラク人権高等弁務官事務所の担当者がアムネスティに語ったところでは、内務省、法務省、防衛省に何度も接見を要求しているにも関わらず、拘束施設や刑務所にいる人たちとの接見は認められず、労働省の施設で拘束されている子どもたちだけには、接見を許されているようだ。

国際法とシーア派民兵の行為

国際人道法（戦争法）は武力紛争の状況下で適用される。イラクでは現在、シーア派民兵と自称「イスラム国」の武装グループとの間で内戦が起きている。民兵は、中央政府の同意のもとで政府軍や治安部隊と連携しながら活動している。したがってシーア派民兵を含むすべての紛争当事者は、国際人道法の適用を受け、従う義務がある。そして民間人など戦闘に積極的に関与していない者は、この人道法により保護される。戦闘に参加して負傷したり降伏したり捕えられたりした者も保護の対象となる。また人道法は、当事者の行為の人道性を問う基準となり、軍事行動の手段や方法を制限する。

一般市民であれ、武装グループ要員であれ、あるいは戦場で捕えられた戦闘員であれ、捕虜を意図的に即決で処刑することは、重大な国際人道法違反であり、戦争犯罪になる。拷問や残虐な取り扱い、強かんなどの性的暴力、人質を取る行為、自由の恣意的剥奪なども戦争犯罪に相当する。

国際人道法のもとでは、民間人、軍人を問わず、個人は戦争犯罪に対する刑事責任を負う。民兵組織や武装グループのリーダーや司令官は、そうした犯罪の防止と抑止に特に努めなければならない。軍司令官や文民の上官が戦争犯罪行為を命じた場合、あるいは行為を事前に知る立場にあったにもかかわらず、防止措置を怠ったり、犯罪者を処罰しなかった場合には、その責任を上司である司令官や上官が負う。また個人は、戦争犯罪のほう助、促進、支援、教唆について刑事責任を負う。

国際人道法は武力紛争の状況にのみ適用されるが、国際人権法は状況に関わらず、常に適用される。イラクには、市民的および政治的権利に関する国際規約（自由権規約）の締約国として、個人の生存権、拷問などの虐待を受けない権利、自由・安全の権利を尊重して保護し、実現させる義務がある。同国は、無責任な民兵組織の創設や拡大を許すどころか奨励さえ行い、その違法な殺害、誘拐、拷問の阻止や犠牲者の救済を怠ってきた。したがって、法的義務に違反しており、著しい人権侵害の責任が問われる。

結論および提言

本報告書で詳述した人権侵害は極めて深刻で、とりわけ準軍事組織のシーア派民兵によってまん延している殺害は、戦争犯罪に相当するものもある。中央政府当局は、民兵による犯行の相当部分に責任がある。民兵は国家から武器を持たされるか武器を持つことを許されてきた。歴代政府は民兵が法的枠組みの外で活動することを許し、奨励してきた。また民兵は自らが行った犯罪の責任を問われることはなかった。

宗派間の対立と無秩序で無責任な民兵組織の両要素が、同国の治安の乱れと不安定さ拡大の原因であり、結果である。そのため、法を平等に適用し国民すべてを保護する意思と能力を持つ、効果的で責任のとれる治安部隊・軍隊を築くことができなくなっている。同時に、法の前での平等など人権を守る公正な司法制度が損なわれている。

アバディ首相が率いる新政権は、迅速で断固たる措置を講じて民兵が支配する状況を覆し、法の支配と差別なき人権尊重を確立することが急務である。その実現に向け、次の施策を提言する。

民兵を取り締まる

- 民兵が甚大で深刻な人権侵害を犯していることを公式に認め、厳しく非難し、反テロ戦争の一環であると正当化しないこと。また治安部隊や軍隊が、国を守り人びとを保護する職務を担うことを明言すること。両部隊の要員は宗派色のない明確な基準で採用させ、法に従って行動させ、厳しい監視を行い、その行動に責任を負わせること。
- 人権基準を遵守した武装解除・動員解除・社会復帰の仕組みを確立すること。この仕組みには、民兵組織要員や、国際法上の犯罪など重大な人権侵害を犯したあるいは関与した容疑で捜査中または訴追中にある個人が、軍・警察・治安部隊に加わらないようにするための、独立した審査制度の設置も含むこと。

加害者に責任を課し、被害者への賠償を行う

- 親政権民兵組織や治安部隊や軍による誘拐、人質行為、強制失踪、超法規的処刑・即決処刑などの違法な殺害、拷問などの虐待などについて、その申し立てすべてを、透明性と独立性を確保して迅速かつ徹底的に調査する仕組みを確立すること。調査者に公的権限を与え、役人や民兵組織のリーダーやメンバーに宣誓の上で尋問を行い、拘束場所（公式・非公式）を含むあらゆる場所や調査に関係すると思われる公的記録にアクセスでき、民兵組織のリーダーやメンバーに調査への協力を強制できるようにすること。
- 行方不明者または失踪者の家族、および違法な殺害の被害者の家族、拷問などの虐待の被害者およびその家族が、国から速やかに十分な賠償を受けられるようにすること。

ABSOLUTE IMPUNITY

Militia Rule in Iraq

MDE 14/015/2014

Published in October 2014

AMNESTY
INTERNATIONAL



アムネスティ・インターナショナルは、1961年に発足した世界最大の国際人権NGOです。人権侵害に苦しむ人びとの存在を知り、「自分も何かできたら」と願う、300万人以上の人びと、一人ひとりによって成り立っています。ハガキ書きをはじめとする、市民の自発的な行動による人権状況の改善への取り組みが認められ、1977年にはノーベル平和賞を受賞しています。

公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 2-12-14 晴花ビル 7F
TEL: 03-3518-6777 FAX: 03-3518-6778
www.amnesty.or.jp